

2022 年度

国 語  
(3期)

(答はすべて解答用紙に記入すること)

(時 間 50分)

番 号		氏 名	
--------	--	--------	--

〔一〕 次の文章を読んで、後の問いに答えなさい。(字数制限のあるものについては、すべて句読点や記号をふくみます。)

幼稚園ようちえんや小学校で、友だちと仲よく遊んだりするとき、「相手の身になりましょう」と言われたりします。けれど、そのことの大切さをよく考えたり、毎日の生活のなかで実践じっせんできているかどうかという点、疑問が残ります。現代の社会は、意識して相手の身になろうとしなければ、相手の身にならなくても済んでしまう仕組みになっているからです。

① 一つは、競争社会という仕組みです。結果を出すことを問われる成果主義の現代社会では、まず自分が勉強して資格を取得したり、いい大学に入ったたり、一生懸命働いてある成果を出すことが求められます。こうした社会を生き抜くには、相手のことなんて考えないほうがいいと言っています。相手のことなんて心配していたら、競争に勝てないばかりか、自分が損してしまうという思い込みも広がっています。

② もう一つは、言葉に偏ったコミュニケーション社会という仕組みです。今の若い人たちは、僕が若いころと比べると話が上手で、話題が豊富、発信力がある人が多いように感じます。すばやく反応して、文章を短くおもしろくまとめたりする力は、SNSで鍛えられているのでしょう。気のきいた話で、周囲をクスツツと笑わせることができる人は人気者。子どもたちの世界の「スクールカースト」でも上位に君臨できているのは、そういう人かもしれません。けれど、こうしたウケることを重視したコミュニケーションの陰で、自分の言葉をもつということと、相手の身になるという力は忘れがちになっているように思います。

A コミュニケーションとは、言葉だけではありません。言葉はコミュニケーション全体のたったの7%といわれています。残りの93%は、声の調子、顔の表情、視線、しぐさ、態度といった言葉以外のもの。僕たちは言葉そのものより、言葉以外のものからずっと多くを受け取って、コミュニケーションをとっているのです。どんなにいいことを言っても、その人が踏ん返り返って横柄な態度でいたら、何か信用ができないと感じてしまうのは、そのためなのです。

SNSでのコミュニケーションのほとんどは、言葉に偏っています。どういう気持ちが進められているのか、細かなニュアンスを文字から読み取るのは、けっこう難しいもの。人によってはまったく逆の受け取り方をしてしまうこともあるでしょう。相手の姿が見えないところで相手の身になるというのは、もともと難しいことなのです。

B ③ コロナ時代になって、オンラインでのコミュニケーションが一気に進みました。画面越しに顔を見て会話ができたとしても、やはり直接会って話をするのは違って、相槌がぶつかったり、間合いが取れなかったり、何となく話がかみ合わないような感じがします。特に、初めて

話す人はストレスを感じるでしょう。こうしたオンラインでのやりとりは、コロナ後もある程度続いていくことが予想されます。

C、今後も、SNSやオンラインでの発信力のあることが重視され、そうした能力をもった人が競争社会でも有利になっていくことは間違いないありません。そうすると、ますます相手の身になる力がないがしろにされてしまうのではないかと。僕はこれをとっても危惧しています。

コミュニケーションは、キャッチボールです。ボールを投げて取る、取っては投げる、この繰り返しで相手のことが少しずつわかってきたり、相手と自分の関係性が出来上がっていきます。それには、I ボールを投げなければなりません。つまり、相手の身になって、相手に伝わるように話すことが必要になります。けれども、SNSを中心にした現代のコミュニケーションは、キャッチボールではなく、自分がいかにすばらしいボールを投げるかに終始しているように思えます。もともと不特定の相手に発信するSNSでは、誰にボールを投げているのかさえあてまいません。

自分が発した言葉に、誰かが「いいね」を返してくれたら、自分という存在も認められたような気分になります。この気持ちは僕もわかります。自分の言葉をわかってくれる人、賛同してくれる人の存在はとてもうれしい。そして、もっとおもしろいこと、もっと過激なことを書いてやろうというふうにはエスカレートしていきます。ある意味楽しい気分になりますが、その言葉を受け取る相手のことまで考えている人はあまり多くないでしょう。

つらいのは、暴走する言葉をもろに投げつけられた人たちです。

プロレスラーの木村花さんが自殺したのは、SNSによる心ない言葉が引き金だったといわれています。執拗に暴言を書き込んだ男は、結局逮捕されました。

子どもたちの世界でも、LINEで悪口を言われた、グループLINEから自分だけ外されていた、といったいじめが横行していると聞きます。小中学校の子どものいじめ認知件数は約61万2500件と過去最多を記録しました。インターネットやSNSによるいじめも増加していて、約1万8000件が報告されています（文部科学省「2019年度児童生徒の問題行動・不登校等生徒指導上の諸課題に関する調査」）。

ネットやSNSによる言葉の暴力は24時間どこにいても続くので、逃げ場がありません。しかも何がきっかけでターゲットにされるかわからない。大人も子どもも、そんな生きづらい社会に生きています。

誤解のないように言いますが、僕はSNSが悪いと言っているわけではありません。<sup>⑤</sup> SNSという難しいコミュニケーションツールを使いこなすには、もっと相手の身になる力を身につけなければ、SNSという道具に振り回されてしまうとやりたいのです。



相手の身になるということは、相手に興味をもつということです。自分のほうから興味をもつと、たいていは相手もこちらに興味をもってくれます。それがきっかけで、お互いに話ができたり、わかり合えたりします。そう、相手の身になることは、人と仲よくなる近道なのです。

人にアピールする特技やすぐれたところがないと、友だちはつくれないのではないか。そんなふうには自信をもてないかもしれないかもしれませんが、それは大きな誤解です。自分のほうから相手に興味をもつこと、そして、相手の身になってみることで、人との距離を縮めることができるのです。相手の身になるということは、自分とは違う考え方、知らなかったことと出合うことでもあります。

II、自分が思っている「あたりまえ」があたりまえではないことにも気づかせてくれます。世の中にはいろんな考え方がある、常識は一つじゃないと気づくことは、人間として豊かに成長していく上で欠かすことができません。

これから III の時代になるといわれています。 III とは、いろいろな個性、いろいろな考え方をもった人たちが、それぞれ認め合いながら一緒に生きていくこと。そんな III を大事にする社会では、相手の身になる力がないと生き抜くことができないと僕は思っています。

そして、最も大切だと思うのは、暴走を防ぐブレーキとしての力です。コロナ禍であらわになったように、残念なことですが人間には人を誹謗中傷したり、言葉の暴力を振るう嫌な一面があります。けれど、相手の身になる力があれば、その方向に流されそうになる自分にブレーキをかけることもできるのです。お互いに傷つけ合うのではなく、声をかけ合う、気遣い合う、助け合うことで、<sup>⑥</sup> 僕たち自身が生み出している「生きづらさ」は**さ**はずいぶん解消されるのではないのでしょうか。

(鎌田實『相手の身になる練習』より一部改変)

- ※1 スクールカースト：勉強以外の能力や容姿などの人気の度合いによって、学校内で生徒児童の間に形成される序列のこと。
- ※2 誹謗中傷：根拠のない悪口を言って相手を傷つけること。

問一 ———線①「競争社会という仕組み」とありますが、筆者は競争社会という仕組みをどのようなものだと捉えていますか。その説明としてもつ

ともふさわしいものを、次の中から選び、記号で答えなさい。

- ア 結果を出すためには自信を持って取り組む必要があり、心配していたら競争に勝てないと思いついてしまふ仕組み。
- イ 成果が求められる中、相手を気にかけることは自分にとって損になってしまふという思い込みが生まれる仕組み。
- ウ 一生懸命勉強したり働いたりして成果を出すことが重要で、相手よりも自分の内面に向き合うことが必要になる仕組み。
- エ 競争に勝つためにはすばやく反応することが必要のため、相手のことを考える余裕がないと思いついてしまふ仕組み。
- オ 相手の身になることを考えていたら自分が損をしてしまふため、しっかりと自分自身の言葉をもつ必要性がある仕組み。

問二 ———線②「言葉に偏ったコミュニケーション社会」とありますが、この社会ではどのようなコミュニケーションが行われますか。その説明

としてもつともふさわしいものを、次の中から選び、記号で答えなさい。

- ア 豊かな話題をもち、活発に会話をかわしあふようなコミュニケーション。
- イ 短くおもしろい文章をすばやくやりとりしあふようなコミュニケーション。
- ウ 周囲の人を笑わせるよう、ふるまい方を工夫して行うコミュニケーション。
- エ 相手にウケるという意味での言葉の発信力を重視したコミュニケーション。
- オ 文章をおもしろくまとめるなどして自分の言葉で行うコミュニケーション。

問三  A、 B、 C に入る言葉としてもっともふさわしいものを、次の中から一つずつ選び、記号で答えなさい。ただし、記号は一度しか使えません。

ア すると    イ そもそも    ウ けれども    エ さらに    オ なぜなら

問四 —線③「コロナ時代」とありますが、コロナ時代では「相手の身になる力」がどのようになると筆者は考えていますか。その説明としてもっともふさわしいものを、次の中から選び、記号で答えなさい。

ア 常にマスクを身につけて会話することが求められるため、お互いの表情が見えなくなり、相手の気持ちが読み取りにくくなっていく。したがって、ますます「相手の身になる力」をつけることが難しくなる。

イ 間合いの取りづらい画面越しのやりとりが増えることで、相手のタイミングをよく考えて発信することが求められるようになる。したがって、「相手の身になる力」は競争社会において重視されるようになる。

ウ オンラインでの何となくかみ合わないようなやりとりが増えることで、発信力がより重視され、競争社会を生き残るためにも今以上にその力が必要になる。したがって、ますます「相手の身になる力」は軽視される。

エ 人と会う機会が大幅に減ることで、初対面の人とのコミュニケーションがうまくいかなくなり、発信力を持つものだけがやりとりしあえるようになる。したがって、ますます「相手の身になる力」は軽視される。

オ オンラインで会話をする機会が増えた結果、相槌がぶつかったり間合いが取れなかったりして、相手に対するストレスを感じることが増える。したがって、ますます「相手の身になる力」をつけることが重視されるようになる。

問五  I に入る言葉としてもっともふさわしいものを、次の中から選び、記号で答えなさい。

ア できるだけたくさん    イ 相手にぶつからないように    ウ 相手がキャッチできるように

エ できるだけスピードの速い    オ いろいろな方向に飛ぶように

問六 — 線④「すばらしいボールを投げる」とありますが、このような人々の具体的な行動としてふさわしいものを、本文の〰線ア〰オの中からすべて選び、記号で答えなさい。

問七 — 線⑤「SNSという難しいコミュニケーションツール」とありますが、筆者が本文でもっとも問題にしているSNSの難しさは何ですか。その説明としてもっともふさわしいものを、次の中から選び、記号で答えなさい。

ア 名前をふせて発言することができ、自分が誰であるか相手に伝わらないため、相手に対する罪悪感を持つことがなく、言葉の暴力を振るってしまいやすいこと。

イ 場所や時間に関係なく、誰もが簡単に発言したり発言を拡散したりできるため、言葉の暴力が消えることなく際限なく世界中に広がっていつてしまうこと。

ウ 発信相手が不特定で見えないことによって、独り言を言っているかのように感じてしまい、自分の発言内容についてまったく考えないで発言してしまうこと。

エ 発信相手が目の前にいなかったり不特定であったりすることや自分が認められる喜びから、相手を想像しないで自分本位の発信をしてしまいやすいこと。

オ 他人から「いいね」をもらうことで自分が正しいと思ひ込み、たくさんの「いいね」をもらうために、自分と異なる意見を受け入れなくなってしまうこと。

問八 

Ⅱ
---

、

Ⅲ
---

に入る言葉としてもっともふさわしいものを、それぞれ次の中から選び、記号で答えなさい。

Ⅱ ア 感情が豊かになり    イ 先入観を持ち    ウ へんけん 偏見がなくなり

エ 考えが固まり    オ 視野が広がり

Ⅲ ア 人権    イ 持続可能性    ウ 多様性    エ 平等    オ かんよう 寛容

問九 ———線⑥「僕たち自身が生み出している『生きづらさ』」とありますが、どのような状態を指していると考えられますか。次の中からふさわしくないものを一つ選び、記号で答えなさい。

- ア いつでもどこでも言葉の暴力に出会ってしまう状態
- イ 人間が元々持っている攻撃性こうげきせいの中で生きている状態
- ウ 人との距離を縮めてしまっているような状態
- エ 相手との関係が言葉に偏った、相手の姿が見えにくい状態
- オ 誰もが言葉の暴力を受ける可能性におびえている状態

問十 筆者は相手の身になることで何ができるようにになると考えていますか。★以降の本文に沿って二〇〇字以内で説明しなさい。

〔一〕 次の文章を読んで、後の問いに答えなさい。(字数制限のあるものについては、すべて句読点や記号をふくみます。)

入学して間もない小学生一年生が、先生に言われたとおりに手をつないで、校内を探検した。教室に戻ると、先生がひとり足りないことに気づく。柏木温之(ハル)という生徒が帰ってきていないのだった。先生は手をつないでいたはずの横山寧々を叱ると、教室の子どもたちを引き連れて、探しに行くことにした。もちろん、子どもたちははぐれないように、手をつながされた。校舎を出ると、柏木はすぐに見つかった。クラスメイトの浅野健太は、彼が何をしていたのかに気づく。

蟻だ、と思った。あいつ、蟻の行列を見てたんだ。

柏木温之がしゃがみ込んでいた場所をひと目見て、浅野健太は瞬時に理解した。そして思い出した。昔。保育園時代。年少組の頃だったか。園庭で蟻の行列を見ていたら、美幸先生に笑われた。健太くん、カワイイね、蟻なんかそんなにおもしろい？ おもしろくねえよ、と健太は即座に答えた。A。蟻を見ていると、笑われるのか。それなら隠さなくてはならない。蟻はおもしろかった。何時間でも見ていたかった。でも笑われるのはごめんだ。不思議なことに、蟻に興味などないように見せかけていたら、だんだんほんとうに興味がなくなってしまった。何時間でも見られていた蟻は、一分も見ていればじゅうぶんだと思えるようになった。俺も大人になったな、と健太は思った。さばさばした気分だったが、少しだけさびしかった。

あのとときの気持ちを、今はつきりと思いつている。あいつは今でも蟻を見ていられるのか。誰にも笑われなかったのか。いや、そんなことはないだろう。笑われても、動じなかった。それは、ものすごく強いってことなんじゃないか。

足を棒きれのように突っ張らせていた柏木温之が、やがてどうでもよくなったみたいに力を抜いて校舎へと連れ戻されるのを、浅野健太は呆然と見た。ハル、と訴えていた。先生はあっさり無視したけれど、名札を差していたから、きっと自分の名前はハルだといいたかったんだろう。

塚谷亜佐美と手をつないで二列に並んで歩きながら、こんなことをしている場合じゃない、と思った。クラスにこんなに強いやつがいたなんて。それまでの健太は、保育園では走ればいつも一等だったし、背も高いほうから二番目だったし、女子にもモテた。小学校に上がっても楽勝だと思っていたのだ。

② 柏木温之。こいつは何者だ。

走るのが速いとか、身体が大きいとか、女子に人気があるとか、そんなことがぜんぶどうでもいいことのように思えた。なんだかわからないけどあいつはすごい。子供心にも怖れを抱いた。だいたい、先生のいうことは聞くものだという思い込みが、いかに固定観念に縛られた、管理側にとって都合のいいものだったかということ、もちろんそんな語彙はなかったけれども、健太は直観で悟った。

蟻か。すげえ。柏木温之、すげえや。

それなのに先生はそれを理解しようとしなかったばかりか、彼を叱った。

B である。わからずやである。これからの俺は、先生ではなく

柏木温之のいうことを信じよう。柏木温之を大事にしよう。健太はそう決めた。自分がまた大人に近づいたような気がした。とりあえず塚谷亜佐美の手をそつと離し、先生に引きずられていく柏木温之の細っこい背中をまぶしく見た。

次の瞬間、ふと、異様な気配を感じた。顔を上げて、健太は自分の目を疑った。校舎の上方で異変が起きていた。上空がピンクに染まっている。なんだろう、この空、この色。信じられないようなピンク。何かすごいことが起こりそうな予感がピンクに塗り込められていた。胸がどくどく鳴った。ふたたびつなごうと伸ばしてきた塚谷亜佐美の手をふりほどき、友達の背中をかき分けて、柏木温之に追いついた。

「ハル、空」

後ろから声をかけると、先生に右手、横山寧々に左手をつながれて歩いてきたハルは、足を止め、そのまますすぐに顔を空へ向けた。三秒か、四秒。ちょうど同じ時間だけ健太も空を見上げていた。これから何かすごいことが起こる、と健太は確信した。健太が顔を戻したのと同時にハルが健太をふりむいて、にこつと笑った。ああ。健太にはわかった。これがしるしだ。ハルのしるしを、俺はちゃんと見つけた。

ハルは勉強ができなかった。一日のうち一秒たりとも勉強のことを考えなかった。学校は勉強をするところです、と先生はいった。柏木さん、聞いていますか、柏木さん。ハルは応えない。柏木さん、あなたは学校へ何をしに来ているんですか、柏木さん。同じクラスの子供たちもハルの声を聞いたことがない。柏木さん、柏木さん。先生の声はどんどん尖っていき、そのうちにハル以外の子供たちがうんざりしはじめる。カシャと誰かの筆箱が落ちる。誰かと誰かが喧嘩を始める。ハルはじつとしていて、先生の声はハルの中には届かない。ハルの声も先生には届かない。そつとしとして。放つておいて。ハルからじんじん発せられる声にならない声は、後ろの席の健太にだけ聞こえている。

健太はハルに宿題をやつてあげてを思いついた。やつてあげるといふよりは、やつてやらねば、と使命感にも似た思いだった。朝、登校すると、まずハルのランドセルから宿題のノートを取る。真っ白なページを開き、健太は算数の宿題の答えを書いていく。先生が教室に来る前にぜんぶ書き終えてしまえばいい。そう考えてがんばつて書く。ハルはそれをぼんやり見ている。健太はハルに感謝してほしいわけではない。ただハルがこれ以上叱られないよう、ハルのためというより自分のためにやつている。ハルが叱られるのを見ているのは屈辱だ。蟻を何時間でも眺めていられた昔の自分が叱られているような苦味を感じる。

始業のチャイムが鳴り、先生が教室に入ってくる前になんとかハルのノートに宿題を終える。間に合つてよかった。健太はひとり、達成感を味わっている。ハルからは感謝の言葉もないが、べつに気にしない。俺って大人だ。そう思ったときだ。机の上に開かせたノートを見てまわつていた先生がハルの机の横で足を止めた。柏木さん、と声を大きくする。普段より険しい顔をしている。宿題は人にやつてもらつても何の意味もありません。厚かましいにもほどがあります、と怒っている。消してやり直さない。

ハルが応えないので、先生はさらに憤る。柏木さん。聞こえますか、柏木さん。ついに先生は、立ちなさい、と怒鳴る。ハルは黙つて立ち上がる。柏木さん、なんとかいいなさい、柏木さん。先生がハルだけを叱り、クラスはまたがやがやとにぎやかになる。居たたまれなくなつて健太も椅子から立ち上がる。僕が勝手にやりました、と健太はいう。ハルは黙っている。やつぱり黙つて突つ立っている。消してやり直さない、先生がもう一度いう。ハルは動かない。柏木さん、消しなさい。耐えられなくなつて、健太はつかつかとハルの席へ行く。机の上に開いてあるノートの文字を、消しゴムで消しはじめる。ハルのために書いた算数の式。答え。健太も猛烈に怒っている。俺はバカだ。こんなもの、やらなきゃよかった。誰のためにもならなかった。得意げに書いた文字を消しゴムで消していく。ハルはそれを黙つて見ている。自分で書いた文字を自分で消すなさいなさい。健太の目からは涙があふれそう。こんなもの、こんなもの。でもハルの手で消されるよりはずつとまじだつた。2Bの鉛筆で書かれた濃い数字がページの半ばまで乱暴に消されたとき、消しゴムのカスの残つたページの上に、水滴が落ちた。

ハルは瞬きをする。無色の滴を見る。健太は拳のお尻でその水滴をこしこしと拭う。ぼとり。そのすぐ隣にまた水滴が落ちた。ハルにもやつとそれが何かということがわかる。消しゴムを握つた健太の手に自分の手を重ねる。健太が驚いてハルの顔を見ると、ハルも健太をじつと見る。何をやっているんですか、と先生がいう。早く消しなさい。ハルは不思議そうに首をまわして先生を見る。

「どうして」

ハルが口を開く。

「どうして消すの」

その声は、か弱い。まだ敬語の使い方も知らない。しかし、その問いはまっすぐだ。せっかく健太がやった宿題を、どうして消すの。先生の顔がさあつと赤黒くなる。浅野さんは自分の分だけやればいいんです。そして柏木さん、あなたは自分の分をやらなければいけないかったです。ハルはうなづく。

「僕は自分の分を自分でやる。だけどこれは消さない。せっかく健太がやってくれたんだもの」

(宮下奈都『ふたつのしるし』より一部改変)

問一  A、 B に入るもつともふさわしいものを、次の中から一つ選び、記号で答えなさい。

- A ア 気持ち悪くなった    イ 悲しくなった    ウ 動揺どうようしていた    エ ズクズクしていた    オ 冷めてしまった
- B ア 好戦的    イ 無作法    ウ 無気味    エ 不平等    オ 理不りふ尽じん

問二 ——線①「少しだけさびしかった」とありますが、なぜ健太はそのような気持ちになったのでしょうか。その説明とでもつともふさわしいものを、次の中から選び、記号で答えなさい。

ア 人から子どもっぽいと思われるところを手放したことで、また一步自分のあこがれる強さを手に入れたように思ったが、同時にこれまで大事だったものを失ってしまったように思えてならなかったから。

イ 人から笑われる自分の弱みを切り捨てたことで、大人から認めてもらえる強さが身についたように思ったが、同時にこれまでの時間が無駄むだになってしまったように思えてならなかったから。

ウ 大人っぽい興味関心を手に入れたことで、自分のかわいらしさがまた一つなくなったことにうれしく思ったが、同時にこれまでの熱意が無意味になってしまったように思えてならなかったから。

エ 他の人と比べて変わったところがなくなったことで、もう笑われることがなくなると安心感を覚えたが、同時にこれまでの自分の長所も失われたように思えてならなかったから。

オ 時間の使い方の方のこつを知ったことで、さらに他の子どもよりも優れた存在になったように感じられたが、同時にこれまでのかわいらしさが消えてしまったように思えてならなかったから。

問三 — 線②「柏木温之。こいつは何者だ」という健太の思いは、ハルのどのような行動から抱かれたものでしょうか。その説明とでもっと

もふさわしいものを、次の中から選び、記号で答えなさい。

ア たとえ無視されようとも、最後まで自分がやりたいことを貫いたあきれるほどの行動。

イ たとえ他の人の迷惑めいわくになろうとも、最後まで管理側の都合の悪い存在であろうとした行動。

ウ たとえ友人からいやがられようとも、最後まで自分が一番だということにこだわった行動。

エ たとえ周りの人から怖おそれられようとも、最後まで思い込みをせず自由であろうとした行動。

オ たとえ先生にどう思われようとも、最後まで自分の好きなことをやり遂とげた意志の強い行動。

問四 — 線③「とりあえず塚谷亜佐美の手をそつと離はなし」という健太の行動には、彼のどのような思いが込められているのでしょうか。その

説明とでもっともふさわしいものを、次の中から選び、記号で答えなさい。

ア 自分の信じるべき人と決めたハルに近づくために、先生の言うことなんかどうでもいいことを見せつけようという思い。

イ 自分の理想にすると決めたハルに近づくために、大人に言われたことを素直にやっているとやめようという思い。

ウ 自分の大切な人と決めたハルに近づくためには、その決意が固いことをハルの背中ごしに証明しようという思い。

エ 自分の信頼しんぱいできる人と決めたハルに近づくためには、女の子に好意を寄せられそうなあまい行動はやめようという思い。

オ 自分のお手本にすると決めたハルに近づくために、自分に好意を寄せる女の子をきっぱり突つき放はなそうという思い。

問五 — 線④「これがしるしだ」とありますが、健太はハルの、どのようなことをあらわす目じるしを見つけたと思ったのでしょうか。一〇〇  
一五字で答えなさい。

問六 — 線⑤「先生の声はハルの中には届かない。ハルの声も先生には届かない」は、二人のどのような様子を表現しているのでしょうか。その説明としてもっともふさわしいものを、次の中から選び、記号で答えなさい。

ア 先生の考えもハルの思いもそれぞれ相手の意志と対立してしまい、ゆずり合う余地がちっとも生まれていない様子。

イ 先生の考えもハルの思いもそれぞれ相手によってはねつけられ、言葉のやり取りが成り立っていない様子。

ウ 先生の考えもハルの思いもそれぞれ相手と結びつかないまま、大きなすれ違いが生まれてしまっている様子。

エ 先生の考えもハルの思いもそれぞれ相手にとっては必要とされず、お互いうんざりした雰囲気かんいきが流れている様子。

オ 先生の考えもハルの思いもそれぞれ相手から受け入れられず、無意味な時間ばかりが続いていつている様子。

問七 — 部⑥「ハルのためというより自分のためにやっている」とありますが、このような自分のために他人に何かを行うことで生じる心のあり方を言い表した言葉としてもっともふさわしいものを、次の中から選び、記号で答えなさい。

ア 帰属意識      イ 共感覚      ウ 自己満足      エ 相互作用そうごきょう      オ 他者愛

問八 — 部⑦「消しゴムのカスの残ったページの上に、水滴すいてきが落ちた」とありますが、ここで「涙」ではなく「水滴」という語が使われているのは、どのようなことを表現するためですか。説明しなさい。

問九 この本文を使った授業のなかで、あなたは次のワークシートを受け取りました。□を埋めることで、ワークシートを完成させなさい。  
なお、X……本文から漢字二字をぬき出して、Y……漢字三字を自分で考えて、Z……十字以内で考えて答えなさい。

「宮下奈都『ふたつのしるし』ワークシート」

★健太とハルの変化についてまとめよう。

○健太

・ □X になりたいという思いが強い

〈これまで〉

↓他の子どもより優<sup>すぐ</sup>れていること、先生の言うこと  
とをしつかり聞くことが、□X に近づく道だと  
考えていた。



〈ハルの姿を見た後〉

↓自分が考えていた道とはちがった道があること  
に気づく。

○ハル

・ 自分の興味のあること以外には □Y

〈これまで〉

↓自然が好き。他人のことは目に入っていない。



〈健太が泣きながらノートを消す様子を見た後〉

↓健太の思いに触<sup>ふ</sup>れたことで、□Z  
ようになる。

〔三〕

次の――線部について、カタカナは漢字に、漢字はひらがなに直しなさい。

- ① 環境問題にカンシンを持つ。
- ② 委員長をツトめる。
- ③ 友達にヒミツを打ち明ける。
- ④ サイバンを傍聴ぼうちやうする。
- ⑤ シュウギン選挙に注目する。
- ⑥ 安全ソウチが作動する。
- ⑦ ケイサツシヨを訪れる。
- ⑧ 日本列島を縦断する。
- ⑨ 冬至の風習を調べる。